

南山大学の『受難』を観て

ミカエル・カルマノ

情報開示(英語で"full disclosure")の一環として、論文や報告書には著者(或いは出版社)と外部の機関との利害関係を明記することが求められている。資金提供しているスポンサーが研究の内容に口を出す懸念もあるし、自社の商品やプロジェクトを紹介する社長は手前味噌と、非難を免れないからである。従って、私は冒頭にはっきりとっておく。南山大学の野外宗教劇『受難』になると、私は客観的に、所謂第三者の立場から語ることはできない。何故かという、私は学生のころからクラブの本拠地であるロゴスセンターに出入りしていたし、現在に至ってはもう20年以上も顧問を務めているからである。しかも、他の受難劇を見たこともないので、私にとって受難劇とは南山大学が毎年開催する受難劇だけなのである。

しかし、私はこの多少偏った見解を(南山大学を会場とした)1997年度日本演劇学会秋季大会で発表*)する機会があった。「南山大学における受難劇について」というタイトルで南山大学の野外宗教劇『受難』の歴史および南山大学の教育との関連を紹介した。自分が撮影したビデオを使いながら、数年の間に学生の取り組み、内容や演出にどのような変化が見られるかに焦点をあてた。具体例としては原作で重要な場面となっている「イエスと聖母マリアの別れ」のシーンである。元の脚本に近い形で厳粛な調子で聖母マリアに「母よ」と呼びかけるイエスは、いつの間にか「お母さん!」と、弱々しく慰めを求めるようになったのである。

キリスト信者でない学生が脚本と演出を担当する受難劇ではあるが、私は(カトリック教会の司祭として)徹底した指導よりも、その都度の助言や誤りの指摘を重視している。実は、「マザコン」にも見えるイエスの態度は、次の公演できちんと神の子にふさわしい凛々しい表現に変わった。そして、南山学園創立75周年記念行事として行われた特別公演の時、練習に入ってからすぐに、イエスの人間性を強調するプロの演出者の発想に対して、学生からのクレームがあった。「南山の伝統に忠実に、イエス役をもっと神らしく表現したい」と。

劇の流れで時々首を傾げたくなる展開もあった。エルサレムに入城したイエスを熱狂的に歓迎した民衆は、神殿から商売人を追い払うイエスを貧しい人の生活を無視すると非難して、離れてしまう。この場面は大分前から劇の重要な転換期となっているし、イエスに出会った人に対してそれぞれ真意が問われるポイントとなっているが、娘を甦らせてもらったのにイエスの言動が理解できず、ついに他の民衆と一緒に「十字架につける」と叫ぶヤイロスの変身ぶりに違和感を覚えたのは私だけではないと思う。その反面、心が熱くなるシーンもあった。病気の友達(ヴェロニカ)の医療費を稼ぐために娼婦になったという、新しいイメージのマグダラのマリアは、「主よ、あなたに帰りたい」と、現役の学生の作詞作曲の歌で見事にキリスト教の精神を表している。

南山大学の受難劇と、20年ごとに遷宮を迎える伊勢神宮には共通点があると私は思う。神宮はほぼ同じ建物にはなるが、各世代にとって自分で作ったものとして、やはり特別な意味を持つであろう。同じように、野外宗教劇の部員は毎年同じ受難劇を演じてくれるが、彼らは毎回自分の思いを組み入れて、変わらない基本的な型を色々工夫して自分の物にしている。南山大学の受難劇が今後も私達一学生、教員と観客—に大切なことについて考えさせ、忘れてはならない課題を思い起こさせるきっかけとなることを祈っている。

(CALMANO, Michael : 学長・人文学部教授)

*)「南山大学における受難劇」(『日本演劇学会紀要』36, p.93, 1998)として、田尻陽一氏による発表内容の概要報告がある。

今、あらためて宗教劇を考える—受難劇を中心に—

石田昌久、中島あき代、加藤富美、関谷治代

はじめに

演劇は総合芸術であると言われる。その所以は、演じる側は身振り・手振りや言葉を中心にあらゆる感覚・能力を総動員して演じ、観る側も視覚、聴覚、知的能力などあらゆる力を以ってそれらを受け止めるからだろうか。一方、本学の学生たちは、古くから課外活動として、毎年秋の野外宗教劇『受難』の公演に全力で取り組み、今では南山の代表的な伝統行事となっている。

「キリスト教世界観に基づく学校教育」を建学の理念とするカトリック系ミッションスクールに身を置く私たちにとって、宗教劇はどのような意味を持つのか。あるいは、今この時代に宗教劇を行うことはどれほどの意義があるのか。受難劇を中心に宗教劇の歴史を遡りつつ、国内外の事例を紹介することで、あらためてこのことを考えるきっかけ、材料としたい。

第1章 宗教劇の歴史

1. 中世宗教劇前史

中世は決して暗黒時代などではなく、ギリシア・ローマの古典古代の文化と、キリスト教、ゲルマン民族といった豊かな三つの世界が絡み合ってヨーロッパを形成した時代であると、近年では捉えられている。演劇についても、古代から完全に断絶した訳ではなく、細々とではあるが生き永らえていた。たとえば、ギリシアでミモス(ローマではミムス)と呼ばれた民間芸能は、その後も公共の劇場ではなく私的な宴席で演じられていたし、後期ローマ時代に人気があった、パントミモスという台詞無しの身振り・手振りや表情等による演劇も存続していた。しかし、それらはローマ時代に時の皇帝から何度も禁止令が下るほどの低俗・下品な内容であったため、キリスト教徒から白い目で見られたばかりでなく、以後永く続くキリスト教会の演劇に対する敵意と不信の原因ともなった。

2. 聖堂における演劇

宗教劇は後世に「典礼劇」と呼ばれる演劇的儀式に始まると言われる。典礼(聖務日課、ミサ)で歌われるグレゴリオ聖歌には歌うことが技術的に困難な面もあった。あるいは、ありがたい旋律であるから新たなラテン語の歌詞を付け加えようという動きがあった。そのため9～10世紀頃から修道院では、正式な聖歌の合間に聖職者たちによって交互に唱えられる対話形式の短い詩句である、「交誦」(トロープス)が考案されるようになった。特にスイスのザンクト・ガレン修道院は有名で、復活祭の冒頭、三人のマリアによる『聖墓訪問』(Visitatio sepulchri)の儀式の入祭唱「クエム・クエリテリス(誰を墓に探し求めるや Quem quaeritis in sepulchro)」はよく知られている。交誦の歌い方を示す「典礼次第書」には赤字で注意書きが施されており、さながら台本のト書きのようである。これが中世宗教劇の始まりとされており、この復活祭の交誦から復活祭劇が生まれたのと同様な経緯で、降誕祭の交誦から降誕祭劇が立ち上がってきたと考えられている。そして、12～13世紀にかけて、典礼劇に聖書からの各種題材が加わり、また、観客ができるだけ現実感を持って観られるようにと舞台背景の装飾も重要視されたり、機械装置にも工夫が凝らされるなどして発展していった。

しかし、前述のようなキリスト教会の演劇に対する嫌悪感にもかかわらず、演劇的なものを取り込むことになった動機・理由は定かではない。ラテン語が理解できない人々への布教に際し、視覚的な要素を利用する方が、教義を理解させるために効果的だと考えたためであろうと一般的に説明される一方で、典礼劇は教会内の構成員による構成員向けの演劇であって、聖書を会衆に理解させるための教育的手段ではなかった、という説もあることは付言しておきたい。

3. 民衆による宗教劇

典礼から劇へと発展した宗教劇が、13世紀になるとなぜ徐々に教会(聖堂)の外へ出るようになったのか、その理由もまた明確ではない。劇の内容・規模が大きくなり過ぎて祭壇や聖歌隊の席では賄いきれなくなり、逆に教会の典礼進行に支障を来すことになったためである、会衆の娯楽的要望に応えるために挿入された喜劇的要素によって、内容が低俗・卑猥になり過ぎたためである、等々の理由が挙げられている。また、そもそも教会内・外の演劇は切り離して考えるべきであり、教会内から外へ出た訳ではなく、教会の外では息も絶え絶えに受け継がれてきたミモス系民間芸能に、農事祭礼や吟遊詩人、托鉢修道士などの文化が結び付いたためである、との説もある。

いずれにせよ、宗教劇が教会の外で発展したことによって、その担い手が聖職者や支配階級の人々から世俗団体や民衆へと移ることとなった。その後も、より大掛かり、かつ、俗悪化する一方の演劇に対して教会は批判を続けたが改善されず、ついにローマ教皇は、1210年、少なくとも聖職者は教会の外で演じられるものに参加することを禁じた。さらにこれが1227年には更新され、1293、1313年の宗教会議でも確認されている。そして出演者は世俗の者となり、費用も職業組合(様々な職業の同業組合)などが負担して、教会は協賛が許可を与えるだけの存在になっていった。また、劇では初めのうちはラテン語も使用されたが、14～15世紀になると各国語が用いられるようになり、内容から形式、費用に至るまでますます大規模化していった。最も顕著なのはフランスで、創世記から最後の審判までのすべてを劇にして、40日間を費やすものを創

り上げた。

これらの宗教劇は平行して発展したものの、土地によってそれぞれ内容・形式や、上演方法、演出などかなりの相違が見受けられる。名称は、総称としては「聖史劇」を通例として使うが、イギリスではMystery(神秘劇)、ドイツではGeistliches Spiel(宗教劇)あるいはPassionsspiel(受難劇)、フランスではMystères(神秘劇)、などと呼ばれることが多い。または、どの祝日・教会暦から派生したかによって、復活祭劇、降誕祭劇、受難劇などと呼ばれることがある。あるいは内容によって、聖体祭劇(聖体を捧持して行列が街を練り歩く)、サイクル劇(創世記から最後の審判までの連続劇または集成劇)、奇跡劇(諸々の奇跡を題材にしたもの)などと区別することもある。さらには、キリスト教的な倫理観に訴えかける寓話劇である道德劇は、準宗教劇とも言える。なお意外ではあるが、ドイツの謝肉祭劇は、キリスト教会とは直接の関係がない民衆劇であるため、通常は宗教劇の範疇には含まない。

また各国の特徴として、ドイツは、素朴だが写実的かつ風刺的なものが好まれたらしい。フランスは大規模なものが多く、冗長過ぎるくらいはあるものの、叙情詩的かつ写実的であると言われる。イギリスは、ドイツやフランスに比べて地味なもの、調和が取れた構成と力強さがあるとされている。舞台の特徴として、ドイツやフランスは並列(同時)舞台と呼ばれ、各場面の装置(マンション)が広場に並べられ、出演者は各場を演じて回り、観客もそれぞれの舞台を移動して観た。イギリスでは、2階が舞台で1階が楽屋の山車舞台がよく使われた。

4. 中世宗教劇の衰退

これまで見てきたように、宗教劇は、誕生後ほどなく喜劇的要素を取り入れて観客の興を惹いたために、低俗化して教会の反発を受けたが、15～16世紀には最盛期に達した。それが16世紀後半から急速に衰退した原因は種々考えられるが、一つには、ルネサンス期を迎えて新しい人文主義的思考が広まり、演劇にも少なくない影響を与えたこと、二つ目として、社会構造変化のために封建的または同業組合的な生活基盤が揺らいだこと、三つ目には、キリスト教会内部の思想的対立が宗教劇に反映し、宗教劇禁止の結果を導いたため、と言えそうである。

5. 中世の宗教劇をどう観るか

私たちは中世の宗教劇をどう観たらよいのだろうか。一つの手掛かりとして、中世の人々の思考が現代人とは随分異なる点が挙げられよう。当時の人々は、時間の概念を一時的なもの永遠なものとの二種類に考えていた。神や悪魔、人間の魂の存在は永遠であって始まりも終わりもないが、人間の生命・肉体にはそれがある。人間の一生は、天国か地獄の何れかに到達する前段に過ぎない。つまり、中世の人々にとって地上の存在は一時的なものでしかなく、時間や場所は大した問題ではない。連続して描かれる個々の劇に因果関係やつながりが無くても、人々は何ら意に介さない訳である。したがって、戯曲が稚拙なのではない。

他の観点として、宗教劇の特殊性—演劇の領域と信仰の領域という二重性—に目を向ける必要がある。宗教劇はただの演劇ではなく、どちらかと言えばむしろ信仰にかかわる方に比重があると思われる。つまり、私たちに感銘を与える力は、芸術的価値よりも出演者の信仰心や観客の信仰心に拠るところが大きいと捉えるべきであろう。現在まで続く、有名なドイツのオーバーアマガウの受難劇(詳細は次章)を思い起こせば容易に想像ができる。

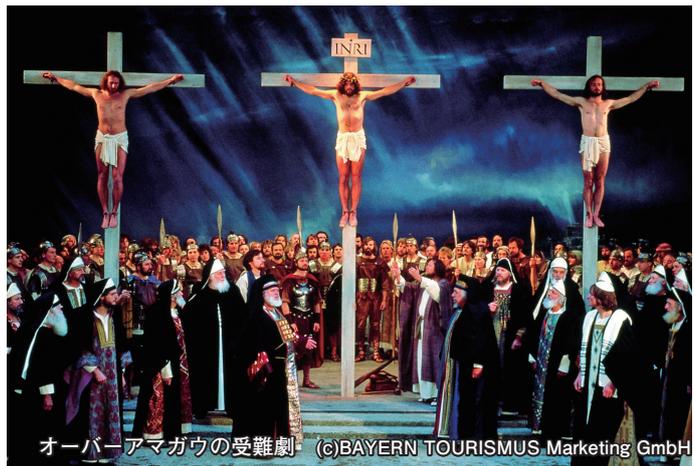
そして、この演者と観客との、信仰心を媒介にした心理的一致こそが、演劇の本質であると言って差し支えないと思われる。宗教劇は単なる演劇ではなく、信仰の領域を持ち合わせているからこそ、却って演劇の本質が体現されている、ということであろうか。

第2章 オーバーアマガウの受難劇

1. 南ドイツの民衆劇

19世紀初頭までのドイツでは各地で民衆劇が行われており、バイエルンの山岳地帯では19世紀になっても民衆劇場が残っていた。聖書を題材にしたものも世俗の話も、民衆劇は喜劇であった。しかし、宗教改革によってこの種の娯楽が民衆から奪い取られた。とくに、カトリックのイエズス会は劇から世俗的要素を取り去り、純粋な宗教劇をつくり、教義と道徳を民衆に布教しようとした。それでも民衆劇は存続し続けた。とりわけ農民の民衆劇は喜劇の形で盛んであった。題材

は、聖書、神話、騎士文学、王様や貴族の物語、中世の英雄や聖人からとられていた。18世紀になっても、キリスト教の宗教劇には喜劇的要素が多く混入されていた。これらは18世紀後半から19世紀初頭の啓蒙主義者や教会から激しく攻撃された。教会にとって、民衆劇は瀆神行為以外の何物でもなく、そのため頻繁に禁止令が出された。この民衆劇・宗教劇はしだいに北ドイツではその影がうすくなり、南ドイツ、特にアルプス周辺の地方に集中されるようになっていった。この地方には由緒ある町や村が多く、それが山間に点在し住民が一般に信仰心が深いため、カトリックの伝統が保たれるのには好都合であったのであろう。これは広くどこにでも見られる現象である。日本でも山間や海辺など地域的に古い芸能が残っていることはよくある。特にこの芸能が宗教に関係深い場合には、その地方が由緒深く、昔栄えながら現在では孤立していればい



オーバーアマガウの受難劇 (c)BAYERN TOURISMUS Marketing GmbH

2. オーバーアマガウの受難劇

有名な南ドイツのオーバーアマガウの受難劇(キリストのエルサレム入場より死去まで)は、疫病(ペスト)除けの請願として1634年に最初におこなわれた。この受難劇は19世紀初頭の批判をかわして、現在まで存続し、観光化している。ただその内容は、教会の意向にそうように変化しているようであるが、このような例は稀である。

オーバーアマガウは、南ドイツ、オーバーバイエルンの山間にある人口5,300人の小村である。中世には、アルプス越えの宿駅として知られていた。今日では、芸術の香り高い木彫りの村として、特に10年ごとに行われるキリスト受難劇の村として広く世界的に有名である。

1618年から1648年にかけての国際戦争、「最後の宗教戦争」、「最初の国際戦争」などと形容される30年戦争の際、1632年スウェーデン軍が進撃していたあとには、オーバーバイエルン一帯は、戦争の鞭としてペストの猛威にさらされた。厳しい山脈によってこの流行から守られていたこの地域も1633年の晩夏にはこの猛威にさらされた。

この時、村人たちは神の加護を祈り、キリストの受難劇を上演することを誓った。「この瞬間から、ペストは、村人たちから、ただの一人も犠牲者を求めなくなった」と言い伝えられている。この受難劇は翌1634年から始められ、1680年からは定期的に10年ごとに上演されることになった。この変更を村人たちに促した理由は、今では定かでない。ただ、こうして世界的になったオーバーアマガウの伝統は、この間350年以上にわたりこの信仰の誓いが守られてきたという驚くべき事実である。

このオーバーアマガウの受難劇は、11幕からなり、各場の前にプロローグと、活人画(物語の場面、背景の前で扮装した人が画中の人物のように静止しているもの)とがある。受難劇は1680年以降ペストの犠牲者の墓地に作られた木製舞台で主イエス・キリストの受難と死、そして復活の劇を上演しはじめた。1730年以降になってバロック風の舞台が作られ、両翼ができて一定の様式の舞台となった。その後も次々と変化し、1830年には受難劇用の牧草地が定められ、そこに専用劇場が1900年に建てられた。現在の劇場は背景の彼方に山々が見え、左右に門が配され、客席は屋根つきで4,700人を収容できる。

上演は早朝に始まり、昼休みをはさみ夕方まで続く。映画化や映像化の要望もその一切を拒否し、商業演劇ではなく、まったくの素人の村人たちが演じる村芝居であることが貫かれている。芝居が好きだけでは実現する業ではない。収入のためというでもない。もちろん義務でもない。無償を成り立たせるのは、受難劇の内容であり歴史を共にしてきた村人の信仰である。その歴史は過去になってしまわない継続した歴史といえる。開演の3年前に配役が決められ、その役にふさわしい生活、つまり、ユダヤ人はユダヤ人らしく、ローマ人はローマ人らしく生活して演劇に臨むといわれる。登場する山羊やろば、馬などもみな本物で、その他裏方まで村人によって行なわれる。また、受難劇の行われる5月から9月末までの期間にはヨーロッパ、アメリカから多くの人々がまるで巡礼者のように押し寄せて来るのである。その数は約50数万人、人口わずか5,300人の静かなアルプス山麓の村は観光客でごったがえすことになる。当然常設のホテルだけではならず、各家庭に民泊することになる。人口以上の、それも言葉も文化も異なる人々を宿泊させ接待をすることは想像に絶することである。村人たちは100回を超える上演が終わると舞台のあとをふり返りつつ、エッタール修道院までの5キロの山間の道を歩いて礼拝をささげて村へ帰り、打ち上げの祝いをする。その時にはもう10年後の上演へと夢はかけめぐっているようだ。

3. 継続する受難劇

受難劇を規則的にくり返し上演することは、当初150年間程は村にとって財政的には大きな負担と犠牲を意味するものだったという。しかし、その後しだいにそれは村人に対して大きな利益をもたらすものになっていった。交通手段が発達し、外国の観光産業が介入することになると、その可能性はいっそう大きくなる。個人生活の営みと聖なる受難劇、村の日常生活と受難劇による宣教との間に大きな断絶が生まれまいとくり返し訴えられることであろう。宗教的演劇には信仰が求められ、信仰にはそこから生まれる日常生活が問われるのである。

受難劇の手稿は13世紀にまで遡ることができると言われる。オーバーアマガウで始められた受難劇にも先行テキストが存在していたであろう。現存するオーバーアマガウの受難劇のテキストは1662年のもので、15世紀の民衆劇の受難劇から影響を受けているという。その後何度か改訂され、ダイゼンベルガー(DAISENBERGER, Joseph Alois, 1799-1883)の台本が基本的に現行のもの底本となっている。また台本が一貫して聖職者の手によって作られてきたことも、注目すべき特徴といえよう。活人画と合唱によって、バロック演劇の影響を今日でも残しているが、しだいに簡潔化され、聖書の記述に近づける努力がなされてきた。

300年祭の1934年にはヒトラーがこの受難劇を見学に来ている。ナチ政権は当時この世界的に知られた受難劇を格好の政治的宣伝に利用しようとした。人種的な反ユダヤ主義を掲げるナチ治下において、オーバーアマガウの受難劇は歪曲を余儀なくされていたようである。また戦後においても1960年の受難劇テキストに含まれる反ユダヤ主義的傾向に対して、とくにアメリカのユダヤ人組織からは強い抗議が提起された。これはアウシュビッツ以後の受難劇のあり方について、政治的、宗教的に問題が多く、ユダヤ教と聖書の扱いの板挟みになり、単なる一地方の問題を越えているといえる。この間にオーバーアマガウの側でも自分の村の伝統である受難劇をめぐる様々な葛藤があった。伝統的テキストに固執する意見の傍らで、大胆な修正と改革を求める声も強くなっていった。受難劇準備に当たっては、受難劇の出来事があった現地を訪ね、ユダヤ教的背景について学ぶ機会も設けた。現在のオーバーアマガウの受難劇にはそのようなキリスト教の重い問いと村人の熱い思いが込められているのであろう。



オーバーアマガウ遠景

第3章 受難劇、さまざまな場所で 1)

1. フランス：ノートルダム大聖堂前で

南山の受難劇上演10周年を記念して発行された『10年の歩み』(1972年)に、当時の野外宗教劇研究会顧問の木村太郎教授は次のように記述している。「…これをド・トリーヌとド・ラ・トゥーラスの二人が約千七百餘行にまとめて一九〇一年に出版したものが現在パリのノートルダム前で上演されているテキストで、これを更にわたしたちは上演時間約一時間半ぐらいにまとめたのである。」「この年パリ二千年祭が行なわれ、その機会にノートルダム前の受難劇上演が行なわれたのであるが、七月に行なわれたこの上演を、そのわずか前にパリを去ったわたしは残念ながら見そこなってしまった。」「パリのノートルダムの前庭での受難劇は一九六五年六月にその三〇周年記念公演を行なったが、中心人物であった演出家ピエール・アルドゥベールの死によって、ついにこれが最後の公演となってしまった。」初演の際に大学の指導司祭であった小松茂神父も「セヌ河畔のノートルダムの大聖堂は、あまりにも有名であるが、私はそこに今もいくつかの思い出をたどることができる。そのひとつがバリー祭と関連して行なわれた宗教劇である。配役は、当時の有名なコメディイフランセーズや、その他の劇場の俳優たちで、中世演劇の再現である。舞台は聖堂前の大広場である。七百数十年の歴史をもち、しかもヨーロッパで最も優雅で美しいといわれる聖堂建築のノートルダムが背景である。…三月といってもバリーはまだ寒い。セヌをなでる風は氷のようである。演出は、すべて中世そのままであるから、それを鑑賞するには、私たちが素朴さを取りもどして当時の人々とならなければならない。舞台の右側には、人形劇が演じられるような小さい小屋がすえられていて、悪玉のユダが活躍を始めるにつれて、小さい悪魔たちがそこに現われて、無言劇を演じる仕組みである。」と記している。南山の宗教劇は、今年で46回目を数える伝統行事になっているが、その始まりは、当時の学生が仏文史の授業中に復元的上演の話を聞き、自分たちもやってみようと言いついたことである。第1回の上演には間に合わなかったが、2回目にはパリのノートルダムでのテキストを木村太郎教授が翻訳口述したものを学生が記録して脚本を作成し、その後も上演のたびに手が増えられたようである。したがって、南山の初期の受難劇はパリで上演されていた受難劇のテキストや演出を参考にしたことは間違いなからう。『10年の歩み』の中には「現在世界的に有名な受難劇は、ババリアのオーベルアメルガムの受難劇と、パリのノートルダム大聖堂前の受難劇である」と記されている。

2. オーストリア：エルル、サンクト・マルガレーテンの村で

残念ながらノートルダム大聖堂前の受難劇上演は終わってしまったようだが、現在でも盛んに行われている地域の代表がバイエルン、オーストリア地方各地である。1633年頃、ペストが猛威をふるった時代に、多数の犠牲者が出た「バイエルン、オーストリア地方各地での受難劇上演はとても盛んで、一五五〇年から一八〇〇年までの間に二五〇ヶ所以上、一六〇〇年から五〇年までだけでも四〇ヶ所以上と云われている」²⁾という歴史的な背景がある。

オーストリア共和国のエルル村は、ドイツとの国境近く、オーストリア・チロル州にある小さな村である。エルル村は「国境の町」として繰り返される戦いに苦しんできた。永野藤夫氏の論文(1970年)によれば「1613年に聖母マリアの巡礼地 Altötting(アルトエッティング)に巡礼した München(ミュンヘン)の巡礼達は、Erl(エルル)の百姓や鍛冶屋が野外で演じた復活祭劇をみた、と記録に残っているが、このテキスト『キリストの復活』(Christi Urständ)が2年前偶然のことから農家の屋根裏部屋から発見され、Dr. P. Kamerによって修正され、C. Bresgenによって作曲され、この夏村の劇場(1959年新築)で初演(所要時間2時間)された」とあり、1613年頃にはすでに上演されていたことが記されている。1933年の火災によって劇場、大道具、衣装などすべてが焼けたが、1946年にエルル受難劇協会が立ち上げられ、1959年には1500席を擁する新しい劇場が建設された。劇場は巻貝の形にヒントを得たユニークな外観で、舞台にはゴルゴダの丘へのぼるつづら折れの道が備えられている。音響的にもすぐれており、近年はチロル音楽祭の会場としても知られている。エルル村の受難劇は、オーバーアマガウに比べて規模は小さいが、歴史は30年ほど古く、人口わずか1,800人の村人のうち、約500人が参加、3歳ぐらいの小さな子どもも出演するまさに村人あげての受難劇である。現在は6年ごとに上演され、次回は2013年。エルル村のキリスト受難劇が始まって400年の記念すべき年にあたり、日本からの観劇ツアーも予定されている。



オーバーアマガウの家屋 (写真提供：西山晃)

同じオーストリアでもハンガリー国境に近い、ウィーン郊外のサンクト・マルガレーテンの受難劇は石材の切出場が舞台である。草壁久二郎氏による紹介文(1961年)によれば、「このサンクト・マルガレーテンは、昨年ここにある石材の切出場で若い前衛彫刻家たちのシンポジョンが行われたことから一躍スポットを浴びた土地だが、その石切場に隣り合った岩山が由緒ある受難劇の野外公演の舞台になっている」とある。「このサンクト・マルガレーテンの受難劇は、数多いヨーロッパの受難劇のなかでも、かなり有名なものらしい。そこでもらったパンフレットによると、この地方に古くから伝わったこの受難劇が、現在演じられるような形式をとるようになったのは、一九〇三年のこと。いらいこの地方の農民たちによって伝承され年ごとに演じられてきたものだが、いろんな事情があってしばらく中絶し、ことしはそれが十年ぶりで復活公演されるとのことだった」とあり、上手につづく丘を村落に、下手の高い丘をゴルゴダの丘にと、自然の景観をバックに石切場をメインステージにした天

1)・3) 第3章および第4章の役職名等は当時のものである。

2)「バイエルン地方の受難劇」近藤公一(同志社大学外国文学研究)80, p.134, 1998/3

然の岩石による壮大な舞台である。もともと13世紀ごろに始まったらしいが、父子伝承によって受難劇の主要な役を代々受け継ぎ、現在でも5年ごとに上演され、次回の上演は2016年の予定である。

3. イタリア：ソロデヴォロの村で

アルプス山脈南西部に接するイタリア共和国ピエモンテ州のソロデヴォロ村はモンテ・ムクローネの麓にある小さいけれど風景画から抜け出たような美しい山村で、こちらも5年に1回、受難劇「パッショネ・ディ・クリスト(La Passione di Cristo)」が上演される。およそ1,300人の村の人口の3分の1以上の人々が参加し、最終的には村の人の大部分が何らかのかたちで関わっていると言われている。村の入り口にある小学校の横には、約3,000人が収容できる「パッショネ」のための野外劇場があり、上演される年の6月ごろにはこの空間は、ヘロデ王の王宮、キリストの連行されたユダヤ人の最高議会である大サンヘドリン、ピラトの官邸、オリブ畑や最後の晩餐のテーブル、キリストが十字架に架けられるカルヴァリオの丘など小さなエルサレムに姿を変える。こういった舞台装置の企画、制作はもちろん、役者、監督、小道具から衣装まですべて村の人々の手によるもので、イタリアでも最大級の民間演劇とされている。もともとの脚本は、ローマにあるサンティ・マルティリ・イントラステヴェレ教会のために書かれ、ゴンファローネの信者会による劇団が毎年復活祭前の金曜日にコロッセオで上演していたが、1539年、宗教改革運動が激しくなり、民衆による宗教劇が廃止された。それがどうやってピエモンテのこの小さな村に伝えられたのかは、はっきりとは分かっていない。ソロデヴォロのサンタ・ルチアの信者会とローマのゴンファローネの信者会が何らかの関係があってこの台本が委ねられた、あるいはソフォデヴォロの毛織物商人だったアンプロセッティがローマの顧客から託された等の諸説があるようである。ソロデヴォロで受難劇が上演されるようになったのは1816年からで、かれこれ200年の歴史があると言われている。上演期間は6月から9月までの毎週末、全体で30回以上というロングラン公演が行われる。次回の上演は、2015年の予定である。

4. スリランカ：ネゴンボ沿岸で

マノエル・オリヴェイラ監督・撮影の1963年の映画「春の劇(Acto da Primavera)」は、スペインの国境に近いポルトガルの山村クラリエで、16世紀に書かれたテキストに基づいて上演されるキリスト受難劇の記録である。登場人物は村人たちで、受難劇を演じているのも村人たちではあるが、ドキュメンタリーではなく、そこで演じられている受難劇をカメラの前で再構成して再現した作品だといわれている。最後の晩餐からイエスの受難、復活までエピソードの断片がつなぎあわせられ、素朴な田舎の素人芝居が淡々と映し出される。

そのポルトガルから大航海時代にやってきた宣教師たちによって受難劇が始まったとされるのが、スリランカの沿岸帯である。スリランカは国民の7割が仏教徒で、ヒンズー教、イスラム教なども混在しているが、スリランカの南西部のネゴンボ沿岸付近は教会も多く、今でもキリスト教が地域の基盤となっている。ネゴンボはスリランカで初めてポルトガル人が上陸したとされる地域で、16世紀頃にポルトガル人の支配下にはいり、ポルトガル人宣教師たちは、沿岸部の住民、特に漁村地域をカトリックに改宗させることに成功した。宣教師たちはその際、よそで行われていたさまざまな宗教儀式も持ち込み、そうした儀式はやがて、当時の既存の芸能形式と融合し、復活祭の祭典と関係する一連の行事が、スリランカの漁村地域にしっかりと根付いたのである。ネゴンボ沿岸を代表するデュフの宗教劇は、もともと等身大の彫像を用いた劇から始まり、やがて人間も演じる様式に変化していったようである。キリストの誕生、ピラトによるさばき、磔刑、そして復活を劇の中心テーマとし、聖金曜日から復活祭までの期間に上演される、400年の歴史を持つ伝統芸能となっている。2009年に20年ぶりに上演されたことが記録されている。

第4章 日本における宗教劇 3)

1. 歴史:宗教劇の受難

日本における宗教劇の歴史は、キリスト教の布教の歴史と共にある。日本に初めてキリスト教を伝えた聖フランシスコ・ザビエルは、1549年に鹿児島に渡来、1551年に大友宗麟に請われ豊後国(現在の大分県)で布教を行った。その歴史に因んで、大分県庁近くの遊歩公園には、聖フランシスコ・ザビエル像、西洋音楽発祥記念碑、西洋劇発祥記念碑等が建てられている。この西洋劇発祥記念碑は、「ソロモンの裁判を願った二人の婦人」の図のレリーフで、ザビエルの布教時代に上演された宗教劇の演目由来する。大分市史によれば、1560年のクリスマスに宣教師トルレスが信者たちに勧めて教会で演劇をさせた、演目は聖書の物語であり、「アダム・エバの墮落と贖罪の希望」「ソロモンの裁判を願った二人の婦人」「天使牧者に現わる」「最後の審判」等で、これに日本風の歌を付けて歌う演劇であった、とある。1561年の復活祭には、「牧者の来拝」「聖墓前のマリヤ・マダレイナ」「ロト物語」「アブラハム物語」「ノアの洪水とソドム滅亡」、1563年と1565年に「アブラハム物語」「アダム・エバ物語」「ノアの洪水とソドム滅亡」、1566年に「アダム・エバの墮落」「アブラハムの供物」「ロトの話」「洪水およびノアの箱船」「ジョセフ物語」を上演した。演出は、人物で話の筋を示し、セリフは日本語の歌、説明は合唱という具合に、能のそれを借りたものであった。セリフ、歌詞、旋律、衣装等について詳しいことはわからないが、今の私たちが観たらさぞや不思議な演劇空間だったのではなからうか。しかし残念なことに、後のキリスト教弾圧により、劇は継承されなかった。ともあれ、これが日本で初めて行われた宗教劇である。



野外宗教劇第1回公演パンフレット

2. 現在:宗教劇の復活

欧米にはキリスト教という強い宗教的基盤があるため、教会から発展し村や町が企画した宗教劇が各地で継承されている。一方、日本では、各地の教会でクリスマス等の行事として子供たちが行う劇は見られるものの、村や町ぐるみの宗教劇は見当たらず、キリスト教系の学校で行われている劇を2件確認できたのみであった。本当に数少ない事例であるが、調べることができた範囲で紹介する。

1件目は玉川学園である。1967年6月17日に、玉川演劇の会が「受難の聖史劇」を都市センターホールで上演したことが、『玉川学園五十年史』に書かれている。この上演を観た木村太郎教授は、かねてより宗教劇は“ぐるみ”で、つまり村ぐるみ、町ぐるみ、大学ぐるみ、学園ぐるみで取り組むことを望んでおられたが、当時南山ではまだその域に達していなかったため、「大学学校打って一丸となって上演したのを見て、わたしは大いにうらやましかった」と『10年の歩み』の中で述べている。

2件目は、長崎にある聖母の騎士高等学校である。創立者は有名なコルベ神父であり、その教育理念の下、学園劇としてカトリックに関係の深い歴史上の人物を扱った創作劇を毎年上演している。始まりは、1994年に聖マキシミアノ・マリア・コルベ神父生誕100周年記念公演「愛の騎士道」からで、翌年、被爆50周年記念「平和の鐘 永井隆博士に寄せて1995」を第1回定期公演とした。HPの解説には「学園に科せられた大切な使命の一つとして『宗教劇』を定期公演という形で行うことに致しました。」とある。以来、第2回26聖人殉教400周年記念劇 風花の丘(1997.2.27~28)、第3回神父発見物語 草笛の道(1997.10.27)、第4回天正遣欧少年使節物語 夕映えの海(1998.10.22)、第5回愛と信仰に殉じた戦国女性 細川ガラシヤ 清流の笹舟(1999.10.22)、第6回キリスト受難劇 往還(みち)(2000.10.20)、第7回乙女峠殉教物語 津和野(2002.1.24)、第8回アジジの聖フランシスコ 兄弟太陽の賛歌(2003.1.23)、第9回聖コルベ列聖20周年記念 船上の涙 長崎からアウシュビッツへ(2004.2.13)、第10回聖コルベ来日75周年記念学園定期公演10周年記念 受難(2005.2.10)、第11回日本188殉教者列福を記念して 風花(2007.10.4)と続いている。

3. 南山学園における宗教劇『受難』の歴史

南山学園の宗教劇『受難』の始まりは、全く宗教的でない。信徒(クリスチャン)でもない一学生が、卒業までに何かでっかいことをやってみたいと、仏文史の授業で聞いた中世宗教劇の上演を思いついたことが始まりである。宗教劇をやるといってもゼロからの出発である。相談を受けた木村太郎教授は、台本としてホイヴェルス神父(上智大学教授)作のテキスト「受難」を用いた。合唱用の歌詞と山本直忠氏の曲が付いていたからである。その学生は、自らキリスト役を演じつつ100名以上の人間を動員し、1963年(昭和38年)11月11日、初回公演に漕ぎ着けた。場所は南山教会聖堂前、主催は、野外宗教劇研究会と南山学園の連名になっている。

第2回公演(1964年5月25日)には、受難劇の代表的作者であるグレバン(GREBAN, Arnoul, 1420-1471)原作の「真正受難劇」(木村太郎訳)を用いた。

大学の移転に伴い、第3回(1965年10月27日)公演も移転後の図書館前に場所を移し、演出も変えた。また、この年から学外の劇場で秋期公演も行われ始めた。

第4回公演(1966年5月28日)以降、場所は大学本館裏(ほぼ現在のパッセスクエアの位置)となり、舞台や観客席を広げた。

2007年には学園創立75周年記念行事として、愛知県芸術劇場大ホールで、初めて野外ではなく屋内で上演した。プロの脚本家や演出家の指導を受け、学園の各単位校の学生や生徒約300名も参加して、オーケストラの演奏や合唱を入れた壮大なオペラ風の楽劇となった。

青春のヒロイズムの熱情で始まった受難劇は、学生の思いどおり、いや思い以上のでっかいことになり、南山学園に相応しい伝統行事として現在に至っている。始まりは全く宗教的ではないと書いたが、カトリックの学園が輩出した学生のアイデアであることを思えば、そこにはきっと神の志が働いていたのだろう。



野外宗教劇第45回公演 十字架のキリスト

おわりに

シェイクスピアは「人生は舞台である。人は皆、役者。」(『お気に召すまま』第2幕第7場)と役者に語らせているが、逆もまた真なり、「舞台は人生である。」とばかりに宗教劇の舞台に人生丸ごとの情熱を傾ける人々がいる。先に触れたオーバーアマガウの村人たちであり、卑近などころでは本学の学生たちである。そして、オーバーアマガウの受難劇を観た人たちは、一様に深い感銘を受けたと述べている。さらに村人と会話した人たちは、その清廉な人柄に驚いている。この理由を探れば、詰まるところ村人たちの信仰心なのであろう。素人が演じるのであるから、職業役者に比べれば技術的に巧いはずはない。それにもかかわらず感動を禁じ得ないのは、作為的に効果を狙うのではなく、単なる身過ぎ世過ぎでもない演技だからだと思われる。それが信仰心に裏打ちされている。翻って南山の学生たちは、たとえ信者でなくとも、キリスト教的精神・素養・世界観を身に付けており、それが知らず知らずのうちに野外宗教劇『受難』に反映されているのであろう。宗教劇の現代的意味もこの辺りに自ずと透けて見えるようである。



オーバーアマガウの木彫土産

【参考文献】

- ・菅原太郎『西洋演劇史』(演劇出版社, 1973)
- ・「中世宗教劇の性格」山内登美雄(美学)5(1), p. 22-31, 1954
- ・永野藤夫「中世宗教劇の理論と実際」『演劇の理論と歴史(現代の演劇 2)』(三笠書房, 1966)
- ・川嶋均「中世宗教劇におけるイエス伝」『イエス研究史: 古代から現代まで』(日本基督教団出版局, 1998)
- ・川野希典『演劇の原像』(晩成書房, 1995)
- ・チェザーレ・モリナーリ著; 倉橋健訳『演劇の歴史 上』(PARCO出版局, 1977)
- ・永野藤夫『独逸中世宗教劇概説』(中央出版社, 1950)
- ・「中世典礼劇の成立」山内登美雄(演劇研究)3, p. 1-8, 1991/7
- ・J. ハーパー著; 佐々木勉、那須輝彦訳『中世キリスト教の典礼と音楽』(新装版, 教文館, 2010)
- ・フィリス・ハートノル著; 白川宣力, 石川敏男訳『演劇の歴史』(朝日出版社, 1981)
- ・海老澤有道『洋楽・演劇事始: キリシタンの音楽と演劇』(太洋出版, 1947)
- ・永野藤夫『オーベルアムメルガウ受難劇研究』(中央出版社, 1950)
- ・宮田光雄『いのちの証人たち: 芸術と信仰』(岩波書店, 1994)
- ・井手雄太郎『オーバーアマガウ受難劇感賞の旅: フランス・ベルギー・スイス・ドイツ』(サンパウロ(発売), 2001)
- ・清水恵三『黙想の旅: イスラエル・アッシジ・オーバーアマガウ』(キリスト新聞社, 1989)
- ・下田淳『ドイツの民衆文化: 祭り・巡礼・居酒屋』(昭和堂, 2009)
- ・永野藤夫『世界の演劇文化史: 人類史の生のリズムを映す世界劇場』(原書房, 2001)
- ・西村雅樹『世紀末ウィーン文化探究: 「異」への関わり』(晃洋書房, 2009)
- ・「野外宗教劇「受難」の歴史」取材: 小寺良奈(南山プレティン)155, 2005/12
- ・「バイエルン地方の受難劇」近藤公一(同志社大学外国文学研究)80, p. 133-151, 1998/3
- ・「チロールとオーバーバイエルンの村芝居: 調査レポート」永野藤夫(横浜国立大学人文紀要. 第二類, 語学・文学), 17, p. 57-70, 1970/12
- ・「Passionsspiele Erl Tirol」 http://www.passionsspiele.at/php/home_de.html [accessed 2012.10.1]
- ・「石切場の受難劇」草壁久四郎(芸術新潮)12(8), p. 88-90, 1961/8
- ・「Passione di Cristo 2010」 <http://www.passionedicristo.org/> [accessed 2012.10.1]
- ・「イタリア・ピエモンテ州・ATLピエツラ公式サイト」 http://212.25.185.207/jap/index_jap.html [accessed 2012.10.1]
- ・「アジア太平洋地域無形文化遺産データベース(ICH)」(財)ユネスコ・アジア文化センター(ACCU) <http://www.accu.or.jp/ich/jp/> [accessed 2012.10.1]
- ・「Duwa Historical Passion Play」 <http://www.passionplay.lankasites.com/> [accessed 2012.10.1]
- ・大分市史編纂審議会編纂『大分市史 下巻』(双林社, 1956)
- ・『図説日本文化史大系 第8巻 安土桃山時代』(改訂新版, 小学館, 1966)
- ・玉川学園五十年史編纂委員会編『玉川学園五十年史』(玉川学園, 1980)
- ・『10年の歩み』(南山大学野外宗教劇OB会, 1972)
- ・グレバン原作; 木村太郎訳『真正受難劇』(南山大学野外宗教劇OB会, 1972)

(ISHIDA, Masahisa ; NAKASHIMA, Akiyo ; KATO, Fumi ; SEKIYA, Haruyo : 図書館事務課)

南山大学図書館「カトリック文庫」

「カトリック文庫」では、近代日本におけるキリスト教史の研究に資する資料群の構築を目的として、明治・大正・昭和初期のキリスト教関係出版物等を収集しています。これまで、購入はもとより、多くの皆さまからの貴重な資料の寄贈によって、コレクションを充実させてきました。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス No.27 2012.11.1発行

<http://office.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/>

発行: 南山大学図書館

カトリック文庫委員会

編集委員: 石田昌久、加藤富美

〒466-8673名古屋市昭和区山里町18

Phone:052(832)3707/Fax:052(833)6986

* 図書館Webページでもご覧いただけます。